

メッセージアウトライン 創世記18:1～33「アブラハムのとりなし」

[1-2]「主は、マムレの櫨の木のところ、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。彼が目を上げてみると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した」

「マムレ」アブラハムと盟約を結んでいたアモリ人。またこれは地名ともなっており、死海の西にある高地のヘブロン地。そこには大きな櫨の木があった。アブラハムは暑さの中、天幕の入り口に座り、うとうととしていたのかもしれない。そしてふと気がつくと三人の人が彼の前に立っていた。これは招き入れられることを待つ姿勢で、ドアをノックすることに相当する。中東地方では旅人をもてなすことが習わしになっており、彼も自分が気がつかなかったことへの面目ない思いから、もてなしのために敏速に行動する。「地にひれ伏した」これは礼拝ではなく、礼儀正しさを表わすため。

[3-5]「彼は言った。『主よ。もしよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさないでください。水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、この木の下でお休みください。私は食べ物を少し持って参ります。それで元気をつけて、それから旅を続けてください。せつかく、しもべのところをお通りになるのですから。』彼らは答えた。『あなたの言うとおりにしてください。』」

「主よ」これは神ではなく「ご主人」という呼びかけで原語が違う。この三人のうち、一目でこの人が中心人物であるとわかったのであろう。アブラハムはこの時点ではまだ神とは知らないでもてなそうとしている。彼らもこのアブラハムの好意にこたえる。

[6-8] アブラハムは天幕のサラのところへ急いで行き、パン菓子を作るように頼む。「三セアの上等の小麦粉」一セアは7.6リットルで三セアは22.8リットル。これで作れば大量のパン菓子ができる。「柔らかくておいしそうな子牛を取り、…それを料理した」三人の客人をもてなすには多すぎるほどの料理であるが、これはアブラハムの最高のもてなしの気持ちを表すためのものであった。もちろん残ったものはアブラハムの大家族がこれにあずかるだろう。「凝乳」チーズになる前の固まった状態の牛乳、山羊乳。こうして三人はアブラハムのもてなしの料理を食べた。

[9]「あなたの妻サラはどこにいますか」サラの名がすでに知られていることは、彼らがただ者ではないと感じさせたことだろう。アブラハムは「天幕の中におります」と答えた。

[10]「すると、そのうちの一人が言った。『わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。』サラは、その人のうしろの、天幕の入り口で聞いていた」

ここでは17:16~21で言われた約束が再び語られている。ここまで聞いていたアブラハ

ムは今、自分の前にいるのは主なる神であるということに気がつき、サラも天幕の中で自分の名前が出たことで聞き耳をたてて聞いていたことであろう。

[11-12] アブラハムとサラはこの時、九十九歳と八十九歳になっていた。(17:24) サラはすでに更年期を過ぎ、子どもを産む能力がなくなっていた。したがって男の子が生まれるなどとは全く考えられない。それでサラは心の中で笑ったのである。

[13-15] 「主はアブラハムに言われた。『なぜサラは笑って…こんなに年を取っているのに』』と言うのか」

主はサラが心の中で考えたこと、笑ったことをズバリと指摘された。「主にとって不可能なことがあるだろうか。…」全能の神のことば、約束を人間の可能性の範囲内で考えて、無理、不可能と結論づけることは神を人間と同じレベルまで引き降ろすことであり、神の不興を買う。サラは自分が笑ったことを否定したが主の前にはそのような偽りは通じない。私たちもやがて世の終わりの時には私たちのすべてを見通される全能の神の前に立つ時が来ることを覚え、信仰を持って正しい生き方に励まなければならない。

[16] 三人の人はアブラハムのもてなしの後に立ち上がり、本来の目的地に向かおうとする。

「ソドムの方を見下ろした」今彼らがいるヘブロンは山地であるので死海南部のソドムを見下ろすことになる。アブラハムも当然のように礼を尽くして彼らを見送りに一緒に行った。

[17-19] 「主はこう考えられた」直訳は「主はこう言われた」。これはアブラハムが主の思いを知ることを目的とするものであったと思われるので、実際はアブラハムに聞こえるような声で言われたと考えられる。「隠しておくべきだろうか」このように主に言われるほどに親しい関係を、私たちも持つ者になりたい。「…地のすべての国民は彼によって祝福される」(18) これは彼の子孫を通して、すなわち人となって来られるイエス・キリストを通して、その祝福が全世界に及ぶということである。

「選び出した」神の使命を行わせるための関係に入れること。その使命とは「彼がその子どもたちと後の家族に命じて、彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるためであり、それによって、主がアブラハムについて約束したことを彼の上に成就するため」であった。「正義」一般的普遍的な正しさ。「公正」善悪の識別、またそれに基づく行為。

アブラハムの子孫は罪と悪に満ちた世界の中で、主の道を守り、正義と公正を行っていく役割が与えられている。そのために主の約束が彼の上に成就するのである。

[20-22] 「主は言われた」主はアブラハムに隠さないでこれからしようすることを告げられた。それはソドムとゴモラのさばきに関することであった。「叫び」非常な不正義、不公正に苦しむ人が助けを求める叫び。そこには神にそむく罪、非常な不道徳、社会的腐敗、ありとあらゆる悪が満ち満ちていた。

「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い」罪や悪が横行して、それがそのまま何のさばきもなしにうやむやにされたり、忘れられるということ

はない。誰が見ていなくても主は見ておられる。誰に知られなくても主は知っておられる。被害を受け、苦しめられ、殺された者たちの叫びは主の前に届いている。→黙示録 6:9~10 今ソドムとゴモラの町は主のさばきのまな板に乗っている。「わたしは下って行って、…見て確かめたい」(21) これは主が事実を知らないから確かめに行くというのではなく、ソドムとゴモラの人々に最後の悔い改めの機会を与えようとしておられるのかもしれない。そしてこの主のことばはアブラハムの次の行動をうながすことになる。「その人たち」(22)とは三人のうちの二人で、アブラハムはまだ残りのひとり、主の前に立っていた。彼の頭は忙しく働きだしたことだろう。ソドムの町には甥のロトがいる。主がその町を滅ぼされるならば、ロトも滅ぼされてしまう。あの東の王たちの連合軍に捕らえられていったロトを命がけで取り返したように、アブラハムは今、ロトとその他の正しい人々の救いのために主に対して必死のとりなしをしようと決意する。

[23-26]「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか」(23)これがアブラハムのとりなしの前提であり、彼の神理解に立った信仰から出たことばである。彼は「もしかすると、その町に正しい者が五十人いるかもしれません」(24)と五十人からとりなしを始める。

「正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことをあなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか」(25)このようにアブラハムは神の公正さに訴えていく。彼はソドムとゴモラに少数の神を信じる正しい者がいることを期待して、神がそのさばきを中止し、ロトたちも助かることを願ったのであろう。

主はそれに対して、「もしソドムで、わたしが正しい者を五十人、町の中に見つけたら、その人たちのゆえにその町のすべてを赦そう」(26)と答えられた。打てば響くような主のお答えである。

[27-28]しかし、アブラハムはまだこれで安心できない。彼は「ご覧ください。私はちりや灰にすぎませんが、あえて、わが主に申し上げます」と身を低くして「もしかすると、五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません…」と尋ねる。主はそれに対して「いや、滅ぼしはしない。もし、そこに四十五人を見つけたら」(28)と答えられた。

[29-31]アブラハムの願いはさらに進み、「もしかすると、そこに見つかるのは四十人かもしれません」と尋ね、主は「そうはしない。その四十人のゆえに」(29)と答えられる。彼はさらに大胆に「三十人かもしれません」、「二十人かもしれません」と尋ね、それぞれ主の「滅ぼしはしない」との答えをいただく。(30~31)アブラハムは五十人から二十人にまで何度も願って人数を絞ってきた。もうこの辺が主の忍耐と譲歩の限界ではないかと私たちは思うのではないか。しかし、アブラハムはもう一度主に願う。

[32]「また彼は言った。『わが主よ。どうかお怒りにならないでください。もう一度だけ私に言わせてください。もしかすると、そこに見つかるのは十人かもしれません』」

ロトとその家族、その友人などを入れれば、最低でも十人くらいはいるだろうと彼は考えたのだろうか。すると主は「滅ぼしはしない。その十人のゆえに」と言われた。

[33]「主は、アブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の家へ帰って行った」

私たちはここにアブラハムの祈り、願いの大胆さを見るが、これは彼が主なる神との正しい関係、親しい関係を持っていたがゆえにできたことであろう。そして、実はこのように彼の祈りを一步一步導かれたのは他ならぬ主なる神ご自身であったのではないか。主は私たちの弱さや限界をよく御存じで、主はまず私たちの一步一步を導き、それができると次の一步一步、そしてまた次の一步一步と私たちの信仰を拡大され、祈りにおいても成長させられるのである。

アブラハムの甥のロトのため、ソドムの町のためのとりなしは十人で終わったが、さらにその先を求めても主は答えてくださったのではないだろうか。

私たちもこのアブラハムのとりなしの例にならって、祈りにおいて大胆に主に近づき、願い、とりなしに熱心に励む者になりたい。家族のため、親族のため、友人、知人のため、この町のため、日本のため、世界のため大胆に、熱心に、祈り続けよう。
→ヘブル 4:14~16,7:24~25